

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第12回

船田 園子

上野國の歌〈東歌〉

上毛野 佐野の舟橋取り放し

親は離れど 吾は離るがへ

(巻第一四 三四二〇)

冬の土手は寒い。

くやしくて飛び出したけれど、行くあてもない。

もって行き場のない心を抱えたまま、ただ歩いた。

「どうして、いつもこうなってしまうのだろう」

同じことのくり返し、くり返し、くり返し。

冬の土手は寒い。

だけど、木枯らしに逆らうことで、自分を感じようとしている。

苦しみに自分を陥れて、自分という存在を確かめている。

親という「しがらみ」を越えて、自分らしく生きたい。

簡単なことなのに、できずにいる。

「上野の佐野の舟橋を取り離すように、親は私たちを引き離そうとするけれど、私たちは離れようか。いいえ、決して離れまい。」この歌は、現在の群馬県高崎市を流れる烏川に架けられた「上野佐野舟橋」が詠まれた東歌である。烏川は、上信国境の鼻曲山に源を発して東南流し、群馬郡倉瀬村・榛名町から高崎市、多野郡新町を抜けて伊勢崎市南部の八斗島で利根川に合流する。その名の由来は、水源にある鳥のくちばしに似た黒い岩からきていると伝えられる。この歌から万葉のむかし、烏川の渡河点では、横並びにつながれた舟の上に板をならべてできた「舟橋」が架けられ、人々の往来を可能にしていたことがわかる。舟橋の利点としては、増水の甚だ



佐野の船橋歌碑▶



佐野橋から烏川を望む

しい時はいち早く固定された綱を放ち、一方の岸に寄せることで、橋が流されるのを防ぐことができたのである。この「舟橋」は一遍聖人絵巻にも描かれ、古の橋の技術を垣間見ることが出来る。そうして、橋はずされた時は、向こう岸へ行くことがならず、もどかしい思いが引き離された二人の想いにつながっていく。

時に川は、恋路の邪魔をする。川に隔てられた二人は、逢うこともままならない。けれど、川の与える試練に、何時しか恋の激しさは増し、想いは募ってゆく。悲しさが愛しさになる。恋しさゆえに、苦しみまでが喜びになる。「上野の佐野の舟橋取り離し」―日々の生活から生まれるからこそ、東歌は温かく、力強い。その土地に生きる人々に共通する心が、一首の歌を通じて都人の心に響く。その心は万葉集に綴られ、時を経て現在にも伝えられる。川は試練と恩恵とを同時に与えてくれる。偉大なる父のように、偉大なる母のように。

「ただいま。」

冬の土手は寒かった。

「おかえり。」

その声は、やさしかった。